

野津田公園
《さとやまのいえ=DOMA HOUSE 構想》
提案書



2005年9月
野津田・雑木林の会

はじめに

私たち《野津田・雑木林の会》は、競技スポーツの拠点となっている野津田公園のもう一つの側面、里山としての自然のすばらしさに注目し、ここに残されている野原と雑木林を守るため、自然観察会を主体としたプログラム「森の学校」など、市民への啓発と保全活動を展開してきました。

その結果、行政からの理解と市民の方々からの共感を得ることができ、野津田公園には、整備後もなお、豊かな自然が、どこか農村と見まがうような風景とともに残されています。

実は、公園の整備は未完の部分を残していますが、私たちの保全啓発活動は、公園内の農地やこの未完の地区も視野に入れ、新たな展開を見せつつあります。子どもが自由な自然体験や野外遊びを行なうことのできる居場所づくりへの取り組みや、公園内での麦作を通じて新旧交流するという試みがそれにあたります。これらの新しい活動は、自然と地域の人々を結びつけた理想的なスタイルとして、それぞれが大きな潮流となり、地域の新たな文化形成にもつながっていくのではないかと感じています。

こうしたなか、私たちが長年の活動を通じて思い描いてきた「雨をしのぎ、道具の収納できる活動拠点が必要」「来園者の学習や休息スペースがほしい」といった願いを整理し、日本の民家にヒントを得ながら、そのイメージを一つの提案としてまとめることにしました。私たちの保全・啓発活動の不便解消と、来園者へのサービス向上を同時に満たすことのできるこのような施設があったなら、野津田公園の里山環境をベースにした市民活動は、多摩丘陵の活用モデルにもなり得るような、拡がりや勢いのあるものになるに違いないという確信が私たちにはあり、これを多くの方々にお知らせしたいと思っています。

なお、この小冊子には、野津田公園内に求められる理想の拠点施設の提案とともに、野津田公園の多様なフィールド特性や私たちの活動もたっぷり紹介されています。町田市行政にかかわる方々をはじめ、広く市民の皆様にもお読みいただき、ご感想やご意見などをお寄せいただけますよう、お願い申し上げます。

2005年9月
野津田・雑木林の会

◆目次

1 章. 野津田公園の自然	3
1.1 北部丘陵の入口、野津田公園	3
1.2 主要なフィールドの特性	4
1.3 特徴的な動植物	7
1.4 草地の多様性	10
2 章. 「野津田・雑木林の会」の活動	13
2.1 野津田・雑木林の会の歩み	13
2.2 会の設立と経緯	14
2.3 いろいろな取り組みと行事	15
2.4 情報発信	20
3 章. 「きつねはらっぱ冒険遊び」活動展開中	21
3.1 経過と活動場所の特徴	21
3.2 活動状況	24
3.3 活動の将来イメージ	27
4 章. 野津田公園に「さとやまのいえ」を!	28
4.1 谷戸山の保全とビジターの交流のために	28
4.2 わたしたちの考える《さとやまのいえ=DOMA HOUSE》	30
4.3 拠点施設づくりのヒント	35
4.4 造り方と運営	38
4.5 「さとやまのいえ」が生み出す活動の発展形	41

資料編

あとがき

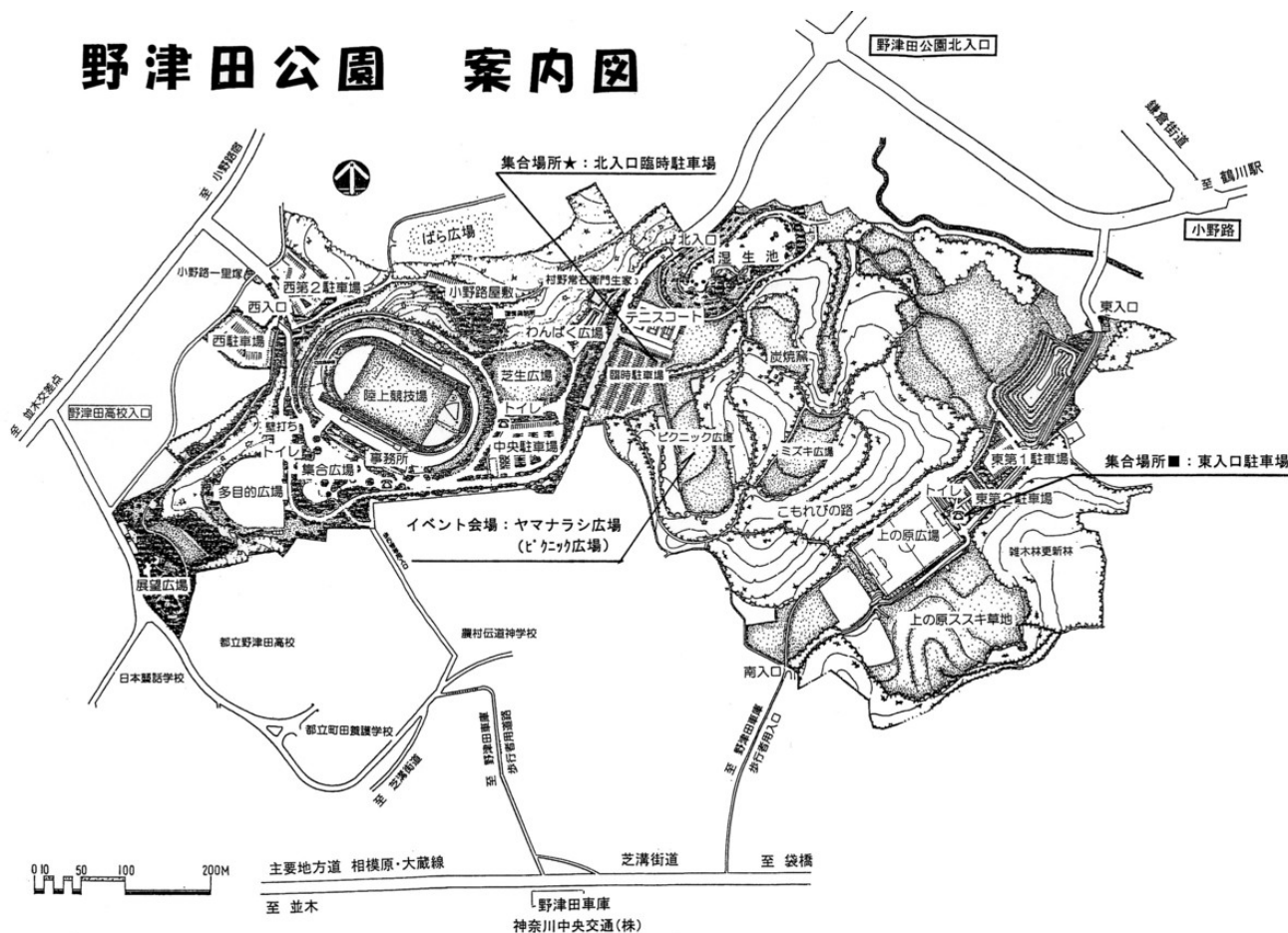
◆ 1 章 野津田公園の自然

1.1 北部丘陵の入口、野津田公園

野津田公園は、町田市のちょうど中央付近に40ヘクタールの広さを構え、町田の原風景が残る小山田や小野路地域など、多摩丘陵の核心部に続く、いわば玄関口に位置しています。

その特徴は、さらに北部の丘陵域に比べ谷戸が広く、浅い谷からできていること、そしてその広々とした空間に樹林と草原、畑地がモザイク状に広がっていることです。こうした環境ならばこそ、来園者は気軽に雑木林や野原を散策することができ、子どもたちの遊ぶ居場所としても格好の場所となっています。

小山田や小野路地域の自然の多様性には及ばないかもしれませんが、奥深い、これらの地域へと足をのばす基地、探訪する入口としての役割を担っています。



1.2 主要なフィールドの特性

野津田公園の中で、里山環境の残る東部～南部エリアはなだらかな地形に林と草地が交互に現れる谷戸山です。この地区の、各フィールドの魅力について簡単にご紹介しておきます。

●ヤマナラシ広場（ピクニック広場）

公園の北入口からもっとも近いこの草原の広場は、在来種のカントウタンポポの群生地です。シンボリックなヤマナラシの木やヒノキを含む雑木林と桑畑に囲まれた野原の風景は、園内屈指のすばらしさです。ポツンと少人数で訪れたときも、ワークショップや秋祭りなどのにぎやかな催しのときにも、この里山の景観は最高の舞台装置を果たしてくれます。



●ミズキ広場

ここはサルナシ谷の源頭部のそのまた上部にあたる、林に囲まれた草地で、背の高いオギやセイタカアワダチソウが群生するほか、アマドコロ、ミズタマソウをはじめ、多くの野草が咲く場所でもあります。野原の奥には、著しく枝分かれしたミズキが数本、腕白な少年少女たちを木登りへと誘うように立っています。林縁のニガキやオオシマザクラの大木など、見られる樹木も個性的です。



●上の原の丘（ヌルデ山）

東入口と南入口の間地点にある野津田公園の最高のビューポイント。小高い禿げ山全体がススキやクズなどの生えた草地となっています。高度感のある丘が銀色に輝くススキの



穂波でおおわれ、ヤマハギの紅色の花をちりばめた秋の眺めは、多摩地区のどこの公園でも見られない、野趣あふれた風景です。野草や樹木も特色があり、春のコヒガンザクラやスミレ、初夏のヤマハタザオ、秋のナンバンギセルなど、ここならではの種類が豊富です。昆虫もたいへん多く、キリギリスの仲間やバッタの仲間が多数生息しています。とりわけ、クツワムシの生息は貴重で、町田市内における数少ない生息地の1つとなっています。

●上の原西部

南入口付近で、平坦な谷底部が広がっている場所です。クリ畑とオギやチガヤ、ナンバンカラムシなどの草地、菜の花畑、麦畑などが見られ、農村風景の長閑さを今も公園の中に残しています。谷を囲む崖には、野草や低木の種類が多く、クサボケ、ナツトウダイ、シモツケ、リュウノウギク、ワレモコウ、オオバクサフジなどが四季を追って開花します。この崖にはまた、野ネズミの巣穴やハチの巣などがよく見つかり、小動物たちの暮らしやすいビオトープとして機能しています。



●きつねはらっぱ

公園東側の未利用地に広がる荒地。
(3章で詳しくふれていますのでここでは割愛)

●こもれびの森



公園中心部、緩やかな尾根から構成された雑木林には「こもれびの森」の名がつけられています。コナラやクヌギの林の中をたっぷりと歩くことができますが、谷をかすめたり、林の合間には草地の広がる広場が現れ、散策する人を飽きさせません。

●更新実験林

東入口近くの雑木林は、「更新実験林」として位置づけられ、町田市によって昔の里山林の姿を取り戻す試みが行なわれています。一定面積ごとに、高木化した樹木を伐採して、切り口から芽生えた新芽を活かして林の若返りを図るのです。公園内には炭焼き施設があり、発生材はここで炭にも焼かれています。私たちの会でも、一部のエリアの管理を受け持ち、動植物の豊かな林を育成する目的で手入れを行なっています。



●サルナシ谷

湧水が流れ、ほぼ手つかずのまま残されている谷で、丘陵部では珍しい植物のサルナシが見つかったことから名がついています。斜面から谷底にかけて、ケヤキやミズキ、アブラチャン、エノキなどが疎林を形成しています。林床ではコバギボウシやキツネノカミソリなどの野草が夏を彩るほか、ヤブムグラなどの絶滅危惧植物も生育しており、現状保護を前提とした適切な保全管理が望まれる場所です。



●炭焼き広場（デイキャンプ広場）



サルナシ谷の上部、ミズキ広場のとなりにある原っぱで、園路を隔てて正面には炭焼き施設が造られています。中央部にチガヤの原っぱがあり、片隅にはコブシやヤブデマリなどの樹木が見られます。炭焼きは、緑化組合の方達の手によって行なわれ、冬季には数回、炭焼きの煙が立ち上ります。

●湿生植物園

調整池機能を持たせつつ、カキツバタ、ハンノキ、フリソデヤナギなどが植栽整備されたビオトープ的な湿生植物園です。コイやミシシッピーアカミミガメなどのたくましい外来生物だけでなく、クロメダカやトウヨシノボリなどの在来小魚が生息し、トンボ類も比較的豊富に産する貴重な水辺環境となっています。



●東入口調整池



多目的広場とともにつくられた調整池。湧水の流れ込みもあり、水質は比較的良好で、クロスジギンヤンマやショウジョウトンボをはじめ多種のトンボ類の発生源となっています。水辺にはガマやコガマなどの抽水植物が生え、市内で見られるほとんどのヤナギ類が生育するなど、野津田公園にはこれまで乏しかった水辺の自然環境が成立しています。

1.3 特徴的な動植物

野原と雑木林、この環境の組み合わせが、野津田公園の豊富な生物相を生み出しています。希少な生物も少なくありませんが、ここでは、シンボリックな、この公園ならではの動植物についていくつか紹介していくことにします。

《マグワ》

養蚕が盛んな時代の名残の木で、純然たる自然の植物ではありません。しかし、桑の実を食べることができ、多くの昆虫が集まるなど、野津田公園での自然観察、体験活動には欠かすことのできない樹木です。公園整備によってかなり減少してしまいましたので、積極的に保全し、増殖させる必要があると考えています。東側の未利用地には、野生のヤマグワとともにまだ何本かのマグワの大木が残存しています。



《オニグルミ》



本来、水辺に多い樹木で、野津田の谷戸にもっと湿潤な状態があったときに生育していた名残りなのだと思います。実は堅いですが生食ができ、「木の実をそのまま食べる」という体験には得難い素材です。この木も少なくとも公園整備前に多数ありましたが、現在、公園内には、野生が1本、移植したものが1本、私たちが実生で植えたものが1本の3本だけとなってしまいました。次世代の苗を育てる試みが必要となっています。

《クズ》

繁茂して嫌われることの多いツル植物です。でも、花は美しく芳香もあり、ツルはさまざまな遊びや細工物に、根っこからはクズ粉が取れ、またいろいろな虫の餌やすみかになり、林のへりにマントをつくる働きもあります。冬芽の痕跡の“顔”（右写真）もユニークです。厄介者扱いするのではなく、野津田公園の大事な自然の構成要素として考えてやらなければなりません。



《カントウタンポポ》

野津田公園の里山が残るエリアにある原っぱは、野の草をそのまま刈り込んで維持されたもの。4月中旬、在来のカントウタンポポは、このような原っぱのあちこちに黄金色の敷物を拵げたように群れ咲きます。近頃、市街地ではセイヨウタンポポの進出がめざましいのですが、ここ、野津田公園ではまだまだカントウタンポポが主流です。



《キリギリスとクツワムシ》

7月も後半になると、昼間、上の原に群生するススキの葉上で、キリギリス（写真左）がチョンギースと鳴きはじめます。鳴き声を楽しむのは簡単ですが、姿を見つけ、捕まえるのはなかなか大変。一方、クツワムシ（写真右）は、夜を待たなければ、「ガチャガチャガチャ」という声を聴くことはできません。キリギリスよりも少し涼しい、湿った草地在が好きなようで、西日のあたらぬ山すその草地に多いようです。



《ウスバキトンボ》

滅多にとまることなく、いつも漂うように飛んでいる、野津田公園ではおなじみのトンボです。7月頃から、野原の上空に漂いはじめ、8月のお盆の頃には、おびただしい群れとなることもあり、盆トンボの異名もあります。生長が著しく早く、長距離飛行も得意で、市内外の水辺で育った個体が、草原上空に集まるのでしょうか。以前はこのトンボばかりでしたが、近年では、ギンヤンマの勇姿やショウジョウトンボなども加わるようになりました。



イラスト：吉谷昭憲

《ヤマアカガエル》

決して水辺が豊富にあるわけではありませんが、園内にある小野路屋敷の池や湿生植物園の湧水部分などに、早春になると毎年ヤマアカガエルが産卵に訪れます。比較的浅く、湧き水が入り込んで冬でも凍りにくい池、大きな魚がすんでいない池、こうしたカエルたちの生息に適した条件を備えた池は意外に少なく、野津田公園でも、湧き水の枯渇が心配です。



《ノウサギ》

多摩丘陵ではキツネはほとんど見られなくなり、タヌキも減少していますが、ノウサギはまだ健在。その特徴的なフンを野津田公園でもあちこちで見かけます。雑木林と草地がバランスよく、広範囲に残され、隠れ家となる藪がほどほどに存在することなどから、生息条件が確保されているのでしょう。いつまでも生息できる自然を維持してあげたいものです。



《アズマモグラ》

東日本に普通に生息するモグラは正確にはアズマモグラと呼ばれています。姿はほとんど見かけませんが、野津田公園のあちこちの原っぱに、掘り返した土でできたモグラ塚が非常に多いことから、相当数の個体が生息しているに違いありません。冬の野原に広がる黒々としたモグラ塚は、この公園の風物詩といえそうです。



1.4 草地の多様性

野津田公園に里山が残る東側のゾーンには、谷戸地形の諸処に草地が広がっていますが、芝生を張った人工草地はほとんどありません。それぞれの場所に生えている草をそのまま活かし、定期的に刈り込むことで、草地を維持管理しているのです。

この、在来植生を活かした原っぱの保全のスタイルは、公園計画当初より私たちが行政に提案してきたもので、草地の生物多様性を考慮した維持管理などほとんど前例がないなか、町田市が、試行錯誤しながら取り組み、今では、すっかり定着しました。場所ごとに草刈り頻度を変えたり、昆虫のために刈り残しをしたりと、管理には大変手間がかかりますが、このおかげで、野津田公園の草地の生物相は、今日まで豊かに保たれていると言えます。

<草地管理の工夫>

●低茎草地と高茎草地

膝から下の高さに草地を維持する（＝低茎草地）ためには、年3～4回程度の頻繁な草刈りが必要です。ヤマナラシ広場やミズキ広場の一部、上の原の下部原っぱなどは、こうした低茎草地管理が維持され、チガヤやカントウタンポポの群落が維持されます。一方、ススキやオギなどが群生している場所は、人の背丈ほどの高さの草地に維持する（＝高茎草地）ことを目標として、年に1～2回の草刈りを実施します。

植物の生長に適した日本の気候下では、草刈りを継続しなければ、すぐに樹木も生え始め、ジャングルようになってしまいます。

●虫の避難場所を刈り残す

一度に大面積の草刈りを行なってしまうと、そこにいた昆虫、小動物などがすみかや隠れ場所を失ってしまいます。そこで、野津田公園では、草刈り時、小面積の刈り残し場所を設け、そこに昆虫などが逃げ込める場所を確保しています。これは、結果的に低茎草地と高茎草地を共存させることにもなり、多様な動植物の生育、生息しやすい条件を維持していることとなります。



〈原っぱの類型〉

「原っぱ」「野原」「草原」と、さまざまに呼ばれる草地植生も、樹林地と同様、そこに優占して生えている草の種類構成によって、タイプ分けすることができますが、その違いは、土壌の硬さ、水分と養分条件、そして草刈りの回数によって決まります。

野津田公園の草地に見られる代表的な草本群落を次表にまとめておきます。

野津田公園の代表的な草本群落

草本群落の名称	草本群落の種類	出現季節	見られる場所	備考
ススキ群落	高茎・多年生	年間	上の原上部	スミレ、フデリンドウなど希少種含む
オギ群落	高茎・多年生	年間	上の原下部 ミズキ広場	広範囲に分布
セイタカアワダチソウ群落	高茎・多年生	年間	上の原全域 ミズキ広場	外来草本 増えすぎれば植生荒廃する
オオブタクサ群落	高茎・一年生	夏～秋	上の原下部	外来草本 増えすぎれば植生荒廃する
クズ群落	ツル性・多年生	夏～秋	上の原全域	他の植生を浸食する力も大きい 昆虫ビオトープとしての機能は大
タケニグサ群落	高茎・多年生	夏～秋	ミズキ広場 炭焼き前広場	規模は小さい
ホソムギ群落	低茎・多年生	初夏	上の原全域 ヤマナラシ広場 炭焼き前広場	牧草由来 年々増加拡大している
チガヤ群落	低茎・多年生	春～夏	上の原下部 炭焼き前広場	面積はあまり広くない
ヒメジョオン群落	低茎・多年生	初夏	ヤマナラシ広場 ミズキ広場 炭焼き前広場	初夏の草刈り前に低茎 草地に群生
カントウタンポポ群落	低茎・多年生	春	ヤマナラシ広場 上の原下部 ミズキ広場	春の景観構成上、重要な 要素

ススキ群落やチガヤ群落、カントウタンポポ群落など、在来草本を中心とした草本群落は景観構成や希少種の保全などの生育基盤となる植生です。外来草本であるセイタカアワダチソウやオオブタクサ、また牧草由来のホソムギ群落なども定着していますが、これらが拡大しすぎれば在来植生を荒廃させることもあり、注意が必要です。

<きつねはらっぱの植生>

野津田公園東側の未利用地（きつねはらっぱはその一部）は以前に遺跡の発掘や造成が行なわれ、また現在も土の出し入れのある残土の置き場があるなど、人為的な攪乱が常に加えられています。その結果、土壌の条件が多様で地形も複雑となり、園内のほかの場所に比較し、より荒れ地的でありながら非常に複雑な草地植生が広がっています。

●野津田公園東側未利用地に見られる草本群落の種類（春季のみ）

・多年生草本群落（高茎・つる性）

ススキ群落／オギ群落／セイタカアワダチソウ群落／タケニグサ群落
オニウシノケグサ群落／カキネガラシ群落／クズ群落

・多年生草本群落（低茎）

ヨモギ群落／ホソムギ群落／スギナ群落／オオバコ群落

・一年生草本群落（高茎・低茎）

セイヨウアブラナ群落／ヤエムグラ群落／スズメノエンドウ群落／ウシハコベ群落
(2005年5月調べ)

このような植生の複雑さは、意図して成立しているものではありませんが、遊びのフィールドや自然観察として、園内のほかの場所と比較し、さらに多様な自然体験を提供してくれる場となっていることは重要なことです。

樹林地と比べて、原っぱという環境の類型化や評価が日本ではほとんどなされていないのが実状です。しかし、たとえば「子どもたちの自然体験の場」を一つ考えてみても、原っぱの方が、複雑すぎる雑木林の生態系よりもダイナミックに、しかも明快に、昆虫と草地とのかかわりを子どもたちに伝えることができる場合が多いと感じられます。遅れている、草地の自然性や多様さについての研究が進み、その環境価値が高まることを期待するとともに、自然体験の場として、あるいは子どもたちの遊び場としての“原っぱ”を、私たちがもっともっと認識しなければいけないのではないのでしょうか。



◆2 章. 「野津田・雑木林の会」の活動

2.1 野津田・雑木林の会のあゆみ

野津田・雑木林の会のこれまでの歩みを、野津田公園の整備経過とともにまとめました。

年表: 野津田・雑木林の会の歩み	
年度	野津田公園の整備経過と会の活動トピックス
1980	野津田公園予定地(40.1ha)が総合公園として都市計画決定される
1981	町田市が「町田市都市計画野津田公園建設審議会」を設置
1982	審議会、中間答申により、運動施設を中心とした基本計画発表、用地買収が始まる
1986	野津田・雑木林の会の前身、「野津田公園を考える会」が発足 自然環境を重視した計画の変更を求める意見書を町田市、及び審議会に提出 第1回、「丘の上秋祭り」を開催(以後毎年継続) 初代環境庁長官大石武一氏、野津田公園を視察
1987	審議会が最終答申を発表。中間答申とほぼ同様の内容 町田市議会に公園計画見直しの陳情署名(3629名)提出
1988	野津田公園基本設計(第1期)が発表される。地形改変の少ない設計への変更や規模縮小が実現 第1期整備工事が着工となる
1989	公園東側未整備地区(24ha)の保全活動を目指した活動が開始される
1990	町田市が、野津田公園内の自然に配慮して計画を見直しする意志を表明 陸上競技場やフィールドアスレチックが整備され、野津田公園が開園する
1992	会が「野津田公園・東側未整備地区活用提案書」を作成、町田市に提出 資料参照
1993	「野津田公園を考える会」が「野津田・雑木林の会」に名称変更。観察会が毎月実施に定例化する 町田市が野津田公園基本設計(第2期)発表。基本方針に「ふるさと自然と文化を守り育てる公園」の一項 が加わり、炭焼き釜の設置や更新実験林の設定、里山文化伝承館の計画など、会の主張が取り入れられる 町田市との共催による「春の里山ワークショップ」が実施される(以後毎年継続) 分科会「草花あそびの会」が発足、小学生向け自然情報誌「しぜんタイムス」発刊(以後隔月発行)
1994	市民大学HATS(町田市教育委員会)の野外学習講座を会が担当する(以後継続)
1996	第2期整備基本設計が発表される 定例観察会が「森の学校」として再スタートする
1997	上の原地区が、第2期整備計画の先行整備エリアとなる。会は原っぱ保全の要望書を町田市に提出 資料参照 上の原のススキ草地で、市内小学校の生活科授業を担当する(以後継続) 会が、更新実験林の一部の手入れと管理を実施する。以後年2回の草刈り、毎月の定点観察等を継続中
1998	全労済助成事業により、「野津田公園自然観察ガイドブック - 野原と林のさんぽみち -」を刊行する
2002	町田市中央図書館の児童書フロアに「小さな自然・展示コーナー」を開設
2003	地域講座(全5回)「子どもが自然と出会う場所～野津田公園の可能性～」を開催 分科会「きつねはらっぱ冒険遊び」スタート
2004	分科会「野津田ふれあいサロン『むぎばたけ』」スタート 野外活動の拠点施設整備計画を行政に提案する「さとやまのいえ」プロジェクトがスタート さとやまのいえプロジェクトを含む「野津田公園 - 里山の保全・活用・人との交流」事業が、日野自動車 グリーンファンド助成対象事業に選出される
2005	「野津田ふれあいサロン『むぎばたけ』」の活動により、第40回 東京都公園協会賞「優秀賞を受賞

2.2 会の設立と経緯について

1993年、里山の保全と利用を、行政と共に考えていこうと発足した私たちの会は、活動の当初に「野津田公園・東側未整備地区活用提案書」を作成、町田市長、ならびに公園関係者と会談の場を持ちました。そして、その年に発表された「野津田公園基本計画（第2期整備）」には、新たに公園の方向性として、“ふるさとの自然と文化を守り育てる公園”という項目が加えられ、炭焼き窯の設置、更新実験林の設定、里山文化伝承館の計画など、会が提案した里山環境の保全の考え方が、多く取り入れられたのです。

また、この年、初めて町田市との共催で、広く市民へ呼びかける「春の里山ワークショップ」も開催されました。当初の活動を担ったスタッフは、小学校低学年の子どもを持つ父母たち。わが子を自然に触れさせながら育てたいと、楽しい企画に力を注ぎ、次第になかまを増やしていきました。



1998年、全労済の助成金を得て、野津田公園自然観察ガイドブック「野原と林のさんぽみち」を作成。冊子は町田市内の書店で販売されると同時に、町田市の全図書館に置かれることとなり、これを機に、より多くの人が野津田公園の自然の豊かさとその自然を利用した当会の活動に目を向けてくれるようになりました。

また公園建設当初より公園の整備にあたっている緑化企業組合の方々にも、公園の未整備地区の自然環境の大切さを理解していただけるようになり、より親しく、また協力を得られることとなって今に至っています。



2.3 いろいろな取り組みと行事

私たちは、かけがえのない、豊かな野津田公園の自然を「守りながら上手に利用していく」ことを、より多くの方々と交流しながら提案・実践していきたいと考え、次のような幅広い活動を行っています。

月例活動

●「森の学校」(第1日曜日)

私たちの活動の基本となる活動です。動植物の観察会や生物調査、林の手入れなどの里山仕事体験、また簡単なクラフト製作等、大人でも子どもでも気軽に参加できる”ナチュラリスト入門コース”の定期的な活動です。観察会を何年も回数重ねてきているにもかかわらず、その度に新しい自然との出会いや発見があるのは、野津田公園の自然のふところが深いということでしょう。



●「きつねはらっぱ冒険遊び」

公園内の、東側未利用地の具体的な活用提案のひとつとして、現場の起伏に富んだ遊休地をそのまま利用できる、冒険遊び場活動を提案・実践しています。

(詳しくは3章参照)

●「草花あそびの会」(第2金曜日)

公園の東端に、市が毎年一定面積の樹林を皆伐して林の若返りを実験している「更新実験林」があります。この会では、植物に詳しい講師といっしょに、この林の定点観察を行い、報告をしています。また、スタッフの学習会を兼ね、季節の草花遊びやわらべうた、童謡などの情報交換も行っています。



● 「ふれあいサロン『むぎばたけ』」(第3 日曜日)

公園南入口から入った上の原地区には、畑地として一部「私有地」が残っています。2003年よりその畑地のひとつを、市が委託管理することになりました。



「ふれあいサロン『むぎばたけ』」は、その場所を当会が市より借り受けて、町田市社会福祉協議会の助成事業「ふれあいサロン」として、2004年11月よりスタート(家族での申し込み多数あり)。昭和30年頃まで、町田市のほとんどの農家が作っていた

ものの、今はごく限られた場所で見かけなくなった麦畑を公園内に再現し、その畑仕事を通して、多くの方々と交流することを目指しています。

地元農家の方を講師として、種まき～収穫～加工・調理まで、“麦”についてしっかりと体験的に学習することを大きな目的としますが、一方、里山環境を利用してきた農家の方の暮らしの知恵を、スタッフが実践的に学び、今後、公園という場での、より意義のある里山保全のあり方を探っていきます。



耕作物：小麦および大麦

《作付け年間スケジュール》

10月	畑全体を耕す(土ならし)
11月	うねづくりと種まき
12月	土よせと麦踏み
1月	堆肥場づくりと麦踏み
2月	麦踏み
4月	土いれと堆肥のきりかえし
6月	刈り取り・麦干し 脱穀(足踏みを体験)
7-8月	製粉(工場へ依頼。一部石臼も体験予定)[夏休み]



収穫後の利用方法

- 小麦 — うどんづくり
- 大麦 — 麦茶づくり、麦こがし、麦芽糖づくり
- わら — 虫かごづくり、ストローづくり、他創作活動に利用。堆肥づくりにも利用。

※収穫物は「森の学校」「里山ワークショップ」「夏休み教室」等において、会員および一般参加者の体験学習素材として利用する。また「丘の上秋まつり」では、広く市民に味わってもらおう。

春と秋のお祭り

●春の里山ワークショップ（4月）

芽生えばかりのヨモギを摘み、その場で、地元農家の方に「草もち」作りを教えてくださいます。会場は雑木林に囲まれた広い原っぱ。雑木林の芽吹きやささしい色合いと、原っぱに一面に咲くタンポポのあざやかな黄色とのコントラストに、参加者は毎年、感嘆の声をあげます。草もちにけるキナコも、大豆を石臼でひいて作っています。午後は、昔ばなしの語りや、春探しゲームなどを楽しみます。親子で、一日ゆったりと”春”を感じてもらおう企画です。



●丘の上秋まつり（11月3日 文化の日）

自然を愛する、自然保護、子どもの文化・福祉に関わっている約20の市民団体が原っぱに集います。手作りや遊びがいっぱいの、のどかなお祭りは、年々、親子連れで訪れる人が増えています。この日だけは、公園から焚き火の許可をいただき、「焚き火パン」を楽しみます。縄文の味がする「どんぐりもち」は公園のどんぐりを拾って、子どもたちと一緒に作っています。



その他の活動

●原っぱでブックトーク・語り（不定期）

本も自然も、子どもたちが生きる力を育ててくれるもの。私たちは本と自然を結ぶ活動にも力を注いでいます。



●夏休み・子ども自然教室

会場は野津田公園の原っぱ及び町田市立中央図書館。館内での企画は、絵本の原画展、6ホールでの上映会とおはなし、ワークショップなど。図書館の協力を得て、「町田の図書館活動をすすめる会」とともに企画・開催しています。

●小学校・生活科のお手伝い（毎年秋）

「原っぱで遊ぼう」をテーマに、具体的内容を会がプランニング。当日はスタッフ4～5名が、虫さがし・虫ガイド・草花あそびをお手伝いします。

●チャレンジ／里山ワークショップ（不定期）

人と自然の関わりをもう一度根元的なところから掘り下げてみようという、実践講座です。これまで不定期に開催し、公園内で手に入る素材に着目して、さまざまな手づくりにチャレンジしてきました。講師は地元の高齢者や農家の方。そして10年来の会の活動で出会った、幅広い分野の専門家やナチュラリストたち。体験を伝えていただくだけでなく、さらに新しい試みにもとを実験しています。

これまで取り組んできたテーマ

くずまゆの草木染め / まゆの糸紡ぎと織り / 草(カラムシ・クズ)から糸づくり
野草茶づくり(チャ・カワラケツメイ) / どんぐりもちづくり / チガヤで縄づくり
セイタカアワダチソウの枯茎ですだれづくり / 伏せ焼き(炭づくり) / 野焼きで土笛づくり
小枝と草でタペストリーづくり etc.

*トピックス：1996年に実施された伝統的な炭焼き

いろいろなスタイルの炭焼き方法があるなかで、もっとも素朴な「伏せ焼き」をワークショップで行ないました(1996年3月22-23日)。講師は、都市近郊の森林をいかに残すかという課題に炭焼きを関連づけて実践的な活動をされている鶴見武道さんです。

穴を掘り、炭材を並べ、煙突を立てと、素朴な工程。作業は子供も大人も全員が参加します。煙の色と温度を手と目で確かめながら、窯口を小さくしたり、窯を閉じたりの作業を一晩かけて行ないました。

大好評で、反響の大きかった企画ですが、残念ながらこの年だけに終わった“とびっきり”のワークショップでした。

↓1996年に会が行なった炭焼き（伏せ焼き）の様子：鶴見武道氏指導



2.4 情報発信

●「野津田通信」(隔月で発行)

会員向け情報誌。会の活動報告や野津田公園の生きもの情報、そして観察レポートや知っているともっと自然が見えてくるといふ豆知識など、楽しい読み物がいっぱいです。



●「しぜんタイムス」(隔月で発行)

子ども向けの自然情報紙。季節のわらべ歌、身近かで暮らしている生き物のおはなし、地域のお年寄りから聞いた“ちょっと昔の暮らし”などで構成している、おもしろくてためになる新聞です。町田市「中央図書館」と「さるびあ図書館」、野津田公園の東入口、管理棟に置いています。(無料)

●小さな自然・展示コーナー

2002年、町田市と中央図書館こどものひろば、理科関係の書架の脇に開設。月々、季節に合ったテーマを設定し、近くの森や原っぱで見つけた生きものたちを関連図書と一っしょに楽しく展示しています。



●ホームページの作成と公開

2004年より、念願だったホームページが完成し、会の紹介から活動予定、報告などが公開されています。

野津田・雑木林の会ホームページ

<http://www.nozuta.net/>

◆3 章. 「きつねはらっぱ冒険遊び」活動展開中

3.1 経過と活動場所の特徴

<経過>



「きつねはらっぱ冒険遊び」活動は、1992年、雑木林を考える会（後の野津田・雑木林の会）作成「野津田公園・東側未整備地区活用提案書」の提案内容を基礎にしています。提案書内（前述）にある「プレイリーダー」（またはプレーリーダー）は、日本で初めに冒険遊び場活動を行なった世田谷区におけるプレーパークの考え方を取り入れたものです。この活動にならない、2003年5月より、野津田公園においても「きつねはらっぱ冒険遊び」の具体的な活動を開始しました。

フィールドは、野津田公園の東入口駐車場を入れて右側の空き地を定位置として、主に台地と斜面地それに隣接した雑木林を利用しています。多様な地形、そしてそこに生息する様々な動植物は、子どもの遊び心を誘います。

<子どもの遊びからみたこの場所の特徴、良いところ>

野津田公園東入口のこの未整備の場所は、自分たちが子どもだった頃、こっそり忍び込んだ町のあちこちにあった空き地と似ています。けれどこちらはもっとそれ以上に、地形の多様さがすばらしいところです。雑草に覆われている広々とした平地と、高低差のある崖のような斜面地がまず特徴です。それを囲むように雑木林が続いていて、切り取られた単純な草地ではなく、広大な里山空間のつながりとして位置しています。そのため生きものが豊かで、草地は特に昆虫が豊富です。また造成をしたことから雑草は外来種が多く、子どもたちは自由にちぎったり倒したりすることによって植物との係わりを身体で味わうことができます。自然と直接触れ合える自由度のある空間、能力に応じて挑戦できる空間は、例えば、



壊したり創ったりという、多様な活動を子どもたちに促します。植物は、ここでは子どもにとって一番身近に、自然な存在であり、遊びの友となっているのです。

市内に空き地のような場所はまだまだありますが、背丈を越える雑草や崖・雑木林が揃っている所は見かけなくなってきました。また、あったとしても柵が張り巡らされ、地主の許可なく自由に立ち入ることができない状態がほとんどです。野津田公園内のこのフィールドを知った親子は、心からここが好きになり、毎回楽しみにしています。「きつねはらっぱ冒険遊び」が開催されていなくても、雪が降れば滑りに来て、夏になれば虫探しに来て、自分たちの遊び場として定着しつつあります。

子どもの遊びから明らかにされた、この場所“きつねはらっぱ”の特徴、いわばフィールドエッセンスを、以下のように考えています。

高低差4メートル以上の土手



盛り土部分は“自然の滑り台”になっていて、ダンボールやシートを使い、スリルある土手すべり遊びができます。良く滑るための工夫が自然と生まれてきます。また身体のバランス感覚も養われます。土がむき出しになっている部分もあり、手や身体でその感触を楽しんでいます。滑ったら登るといのように、土手を登る

活動は不可欠です。子どもにとってこの斜面は急で、登りきることが子どもたちの目標になります。土に手をついて四つんばいになったり雑草やロープにつかまったりと、小さな幼児でも挑戦しています。

●遊べる雑木林



希少価値の高い植物が生育しているエリアから少し外れるため、気兼ねなく入り込んで遊ぶことができます。ハンモックやモンキーブリッジ、ターザンロープなどといったロープ遊具を養生して取り付けやすい立木が多く、木登りも可能です。ここでは子どもたちが様々な挑戦をし、バランス感覚はもとより自分の身体能力を伸ばし



また危険回避能力を養うことができます。同時に子どもたちは“幹や葉に触れ、木の実を味わう”ことによって観察力が養われ、季節を感じるすることができます。

●夏は大人の背丈を越える雑草が生える

夏場は雑草が生い茂り、カマキリ、チョウ、バッタなどの昆虫も多く、“思う存分虫探し”に興じることができます。歩けば飛び立つ昆虫に歓声を上げています。また、背丈の高い雑草を使って基地をつくったり、間を縫っての迷路遊びなど、子どもにとって、草は自分の体力にあった活用しやすい素材です。“大人です

ら隠れてしまう草の海”に、子どもたちは少しだけ大人から見えなくなる楽しみを味わえます。これほどの面積があり、雑草が幾重にも行く手をふさぎ、昆虫の楽園のようにになっている場所は、この町田ではもうほとんど見ることができなくなっていました。子どもたちは生き物の命に触れ、また冒険心や創造力をかきたてられる場にもなっています。



●見晴らしの良さ

“遠くの景色が見渡せる”のはとても気持ちが良いものです。小さなことにこだわらず、心がおおらかになれると思います。これは、今の時代にとっても貴重なことではないでしょうか。電子ゲーム機で疲れた目を癒すのにもとても良さそうです。広々とした草地から続く雑木林、この景観がまず目に飛び込んできて、その緑の色を引き立てるのは遮るもののない空の青さです。“広々とした空間にぽつんと自分が一人”、そうした空間状況に、子どもたちは自分を囲む自然をいっそう強く感じているようです。

●空間のつながりとまとまり

活動では“雑木林と草地を行き来する”ため、出会う生きものは実に多様です。工作や造形をする時に、草や木や葉、あるいは実など、子どもたちは必要なものを自分で行ける範囲内で見つけてくることができます。切り取られた街中の空き地との違いは、“雑木林につながるの



ある草地”だからこそ生きものが濃密に生息しており、生態系の循環に基づく食物連鎖もきちんとあるということでしょう。その事によって子どもたちは、教えられるまでもなく、自ずと自然を生のまま観察し、見つけていくことに夢中になります。またひとつの遊びに飽きても、広がりのある空間は、自分の気持ちに合わせて展開することができます。自然を相手に興味に応じて遊びが新しく生まれたり、より高度になって様々に挑戦し続けていくことのできる遊びを、この空間は提供してくれます。

さらに付け加えておこなうならば、野津田公園という公園内であり安全性があること、無料の大きな駐車場があること、何よりプレーリーダーを含めた大人がその場に必ず居ることは、この特徴をより良く活かしていける要因であると思われます。



3.2 活動状況

活動は「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーに、子どもたちが自分のやりたいことを、自分のペースで思うままにやれる場を目指して行なっています。スタッフは、世田谷区のプレーパークにおいて、プレーリーダーとして経験を重ねてきたこともあり、子どもの遊びを、それぞれの子どもの個性や関心に応じて豊かに展開することには自信を持って



工作素材は間伐材・竹・木の実など



子どもが普段使えない鋸や金槌を用意
れるように様々な道具、素材、用具を用意しておくのです。

参加者は乳幼児から大人まで1日約50人ぐらいです。広い駐車場があるため、乳幼児を連れた人や交通の便が悪い参加者が車で来ることができます。子どもを連れた保護者同士の良いコミュニケーションの場にもなっています。

費用は、子どもが一人でふらっと来て遊べるように、基本的に無料です。ただし、夏休みだけ、連日開催で元気な子どもが賑わうという状況から、大人の方より保険代100円を参加費としてもらっています。

この場を気に入ってくれた常連の参加者もいます。天候があやしくってもやって来る参加者がいるので「雨が降ったらお休み」と広報では案内していますが、急な雨に対してはタープを張って対応しています。ひどくなると雨をしのげる場所がないため、参加者はあわてて帰らなければなりません。

活動費は、一時的な助成金やカンパ、そして個人の持ち出しでまかっています。現状復帰のため、素材はあちこちから集めて車で運び入れ、終了後、車に回収して処理しています。また道具、遊びの素材（ペーゴマ、シートなど）も車で運んでいます。その管理収納はスタッフの個人宅納屋で行なっています。

います。最初の2年は四季それぞれに1回ずつの試行的な開催でしたが、2005年4月より毎月1回の開催頻度で活動しています。企画したプログラムはなく、何かをしなさいと求められることもありません。参加者は自分で遊びを見つけ工夫して、より深く遊びに没頭することができます。もちろんお昼寝も、のんびり過ごすことも誰にも気兼ねせず、それぞ

れの思いが尊重されます。やりたいことがや



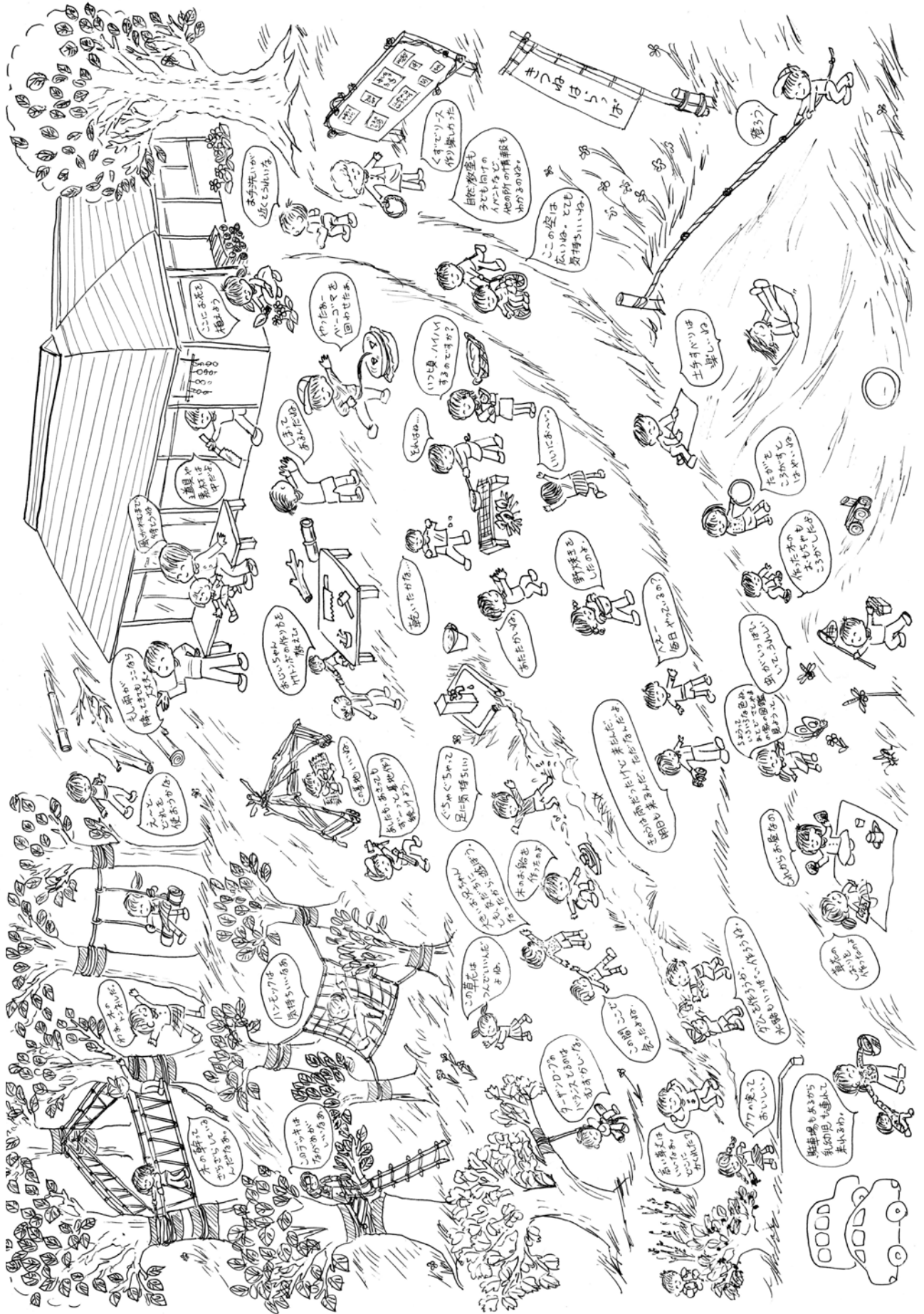
泥遊びしながら素手・素足で
土の感触を味わう

<子どもたちの様子>

- ・ 子どもたちは、五感を働かせることが多くなりました。
- ・ 遊びを創造しています。
- ・ 社会性が培われています。常連の子どもたちが、遊びをリードしている時があります。
- ・ 冒険心や探検心が育っています。
- ・ 危険回避能力が養われています。
- ・ 自主性が育っています。
- ・ 情緒が豊かになって生き物の命に触れることができます。とった虫を最後に放してあげるなど、優しさを感じられます。
- ・ 手を動かして形作り、道具に慣れることができます。
- ・ 親が自分の子どものいろんな面を見ることができて、成長を感じられます。
- ・ 最初来たときは携帯ゲームや持っていたサッカーボールでしか遊んでいなかった子どもが、だんだん活発になって、やがてそれらをそっちのけで遊びに入っていた事例もあります。
- ・ いろいろな教科の学習の基礎になるものを体得できます。
- ・ 昔遊び伝承の場となります。
- ・ 開放感を味わえます。
- ・ 集団遊び、異年齢遊びが生まれています。
- ・ 自分にあった大人との出会いがあり、また会えることが楽しみとなっています。
- ・ きつねはらっぱ”における地形・自然・遊びのかかわり

地形	自然の要素	遊びの種類
台地	<ul style="list-style-type: none"> ・ 土 ・ 石 ・ 多様な雑草 (草丈の高低、茎の太い、匂いの違い、食べられる草等) ・ 多様な生きもの (昆虫、爬虫類) ・ 生きものの痕跡 (ノウサギのふん) 	鬼ごっこ／おいかけっこ／かくれんぼ おしくらまんじゅう／ボール遊び 新聞チャンバラ／紙飛行機／弓矢／槍投げベーゴマ／釘さし／穴掘り／迷路づくり 水遊び／泥遊び／タガ回し／工作 手作り楽器演奏／草の基地づくり ツルの綱引き／草花遊び／草笛／虫探し ネイチャーゲーム シートを使って草のクッション／お昼寝 日向ぼっこ／お弁当を食べる、など
斜面地	<ul style="list-style-type: none"> ・ 土 ・ 雑草と根 	土手すべり／土手登り／走り降り／ ダンボールのソリづくり／転がし／タガ回し、など
雑木林	<ul style="list-style-type: none"> ・ 多様な木 (幹、葉、実) ・ 多様な生きもの (鳥、昆虫類) 	ハンモック／ターザンロープ／ブランコ／木登り モンキーブリッジ／森の探検／シノダケ取り 落ち葉プール／木の実の味見 ツルを使ったリースづくり、など

図-1 きつねはらっぱ冒険遊び 活動の将来イメージ



3.3 活動の将来イメージ

◆4 章. 野津田公園に「さとやまのいえ」を!

4.1 谷戸山の保全とビジターの交流のために

野外活動にこそ屋内施設が必要!野津田公園における自然観察会やワークショップなどの活動を長く続けてきた私たちの願いです。その理由は、一言でいえば、フィールドに屋内施設があることで「雨天対応」「用具収納」「情報交流」という3つの大きなメリットが生まれるから。公園の自然を楽しみ、守り、育てる市民の活動が、野外施設「さとやまのいえ」によって大きく広がる可能性のあることをもう少し詳しくみていきましょう。

①全天候型の野外活動へ

屋根つきの集会場所があれば、野外活動は全天候に対応するものとなります。自然観察会実施中に天候が急変し、雨をしのぐことができるといったことももちろんですが、野外活動の企画段階から荒天時の室内プログラムを準備し対応できることは、谷戸山の観察・学習活動を計画的に実施するうえで大きな強みとなります。

また、ワークショップなどの活動プログラムによっては、平らで安定した場所や水の給排水が近くに必要になることがしばしばあり、作業台や流しなどが施設に用意されれば、谷戸山をテーマとした学習活動、体験活動が飛躍的に展開することは間違いありません。



庭を広くとり、使用に自由度も高い、野山北公園 里山民家（武蔵村山市）

②多くの道具を必要とする谷戸山の保全・活用作業

野原で親子いっしょによもぎだんごをつくる里山ワークショップ、雑木林の手入れや剪定枝を利用した木工、伝統的な方法による畑作、冒険遊び場活動など、野津田公園で多様な活動を行なっている私たちは、実にたくさんの備品、道具を必要とします。鎌に鋸、熊手にかご、スコップに鍬、そしてブルーシートなど、数えあげたらきりがありません。こうした道具の一部は、寄贈を前提として市の倉庫に置かせていただいたり、自宅からその都度運搬するといったことで対応してきましたが、公園にかかわる市民活動の専用物置や倉庫スペースがあれば、運搬の労力は著しく軽減され、物品も一括して管理ができることとなります。



鎌にナタ、鋸、スコップ、各種農機具やかご、かまどなど、里山の仕事やイベントに使用する道具はたくさんある

③新しいビジターと常連の情報交流の場に

屋内施設は公園に常連の市民だけが使うものではありません。施設内外に情報発信や展示の機能をもたせることで、来園者や遠方からの視察者等を出迎える施設に早変わりします。迷子にならないための公園マップやイベントガイド、北部丘陵への散策ガイドなどを用意し、併せて野津田周辺の自然や市民活動のパネル紹介などを展示できれば、屋内施設は里山をキーワードにした立派な市民交流の拠点施設になることでしょう。



公園内の自然をわかりやすく、タイムリーに展示する



地図やさまざまな情報も用意したい

4.2 わたしたちの考える 《さとやまのいえ=DOMA HOUSE》

切実な願いである、野外活動のための拠点施設を、これまで重ねてきた観察会やワークショップ等の経験、そしていろいろな事例を基に、形にしてみました。豊かな谷戸山にふさわしい多様な活動が展開でき、ある程度の人数の利用が確保できることを想定すると、中途半端な施設規模では著しく機能が低下してしまうことがわかったため、ひとまずは理想的なスタイルの施設に、必要な機能を盛り込んでいます。また、施設そのものだけでなく、中庭や周囲の空間も、内部構造と一体的、あるいは連続的に重要な環境として表現されています。

なお、多くの施設イメージの検討結果から、日本の民家が持つ、“土間”という空間が、こうした野外拠点の作業性や交流機能のために、非常に効果的な役割を果たすことが導かれ、土間という民家の意匠を大胆に取り入れることで意見がまとまりました。

名称もこれに因み《さとやまのいえ=DOMA HOUSE》と呼ぶことにしたものです。



次ページ以降、野津田公園に設置が望まれる拠点施設《さとやまのいえ=DOMA HOUSE》の空間利用図（図-2）鳥瞰図（図-3）、施設平面図（図-4）を示します。

● 《さとやまのいえ=DOMA HOUSE》の空間構成

[空間利用図(図-2)参照]

①野津田公園への来園者を迎え入れる正面玄関は明るく見通しが良く、そのそばに掲示板があり、様々な情報を発信できるようにしてあります。

②正面玄関に入って右側は、受付と事務室になっています。職員やボランティアが常駐していて、全体を管理するとともに、来園者に対する案内もしています。

③玄関正面には展示室の一面が見えます。そこには、四季折々の「旬の自然」が「実物」を上手に利用した紹介がなされています。(例えば、まず、薄緑色のきれいな繭と、青々とした緑の葉を入口から目につくように展示しており、近づくと葉には生きているヤマユガの幼虫が見られ、隣のパネルでは簡潔なヤマユガの紹介もある。) その「旬の自然」に誘われて、そのまま進むと展示室に入ります。そこでは、「旬の自然」の他に、野津田公園や周辺の自然の特徴、おすすめの散策路などの紹介がされ、初めての人も見ながら散策できるセルフガイドマップなども置いてあります。さらに、多摩丘陵で使われてきた農具や民具なども展示されています。一部のものは、実際に利用しながらのいわば「動態保存」です。



④その奥には狭いけれども充実した図書コーナーがあり、野津田公園で見つけた動植物を調べることができたり、より詳しい地域情報を得られるようになっています。

⑤玄関に入って左の方は、広い「土間」になっています。この土間こそ、この建物を特徴づけるもので、ここで様々な体験活動などが行われます。一面には実際に煮炊きに利用できる「かまど」もあり、様々な行事や体験活動のときに利用されています。



⑥土間は「板の間」につながり、土間から板の間に入るとすぐ「いろり」が目につきます。そのいろりには、寒いときにはいつも火が入っていて、様々な人が、いろりの周りでくつろぎ、話をしています。板の間では、土間と同様、様々な体験活動が行なわれますが、普段は子供の室内遊びの場になります。また、折りたたみ机を利用した寺子屋風学習室にも早変わりします。



⑦板の間の南側は、広い掃き出し窓になり、広い

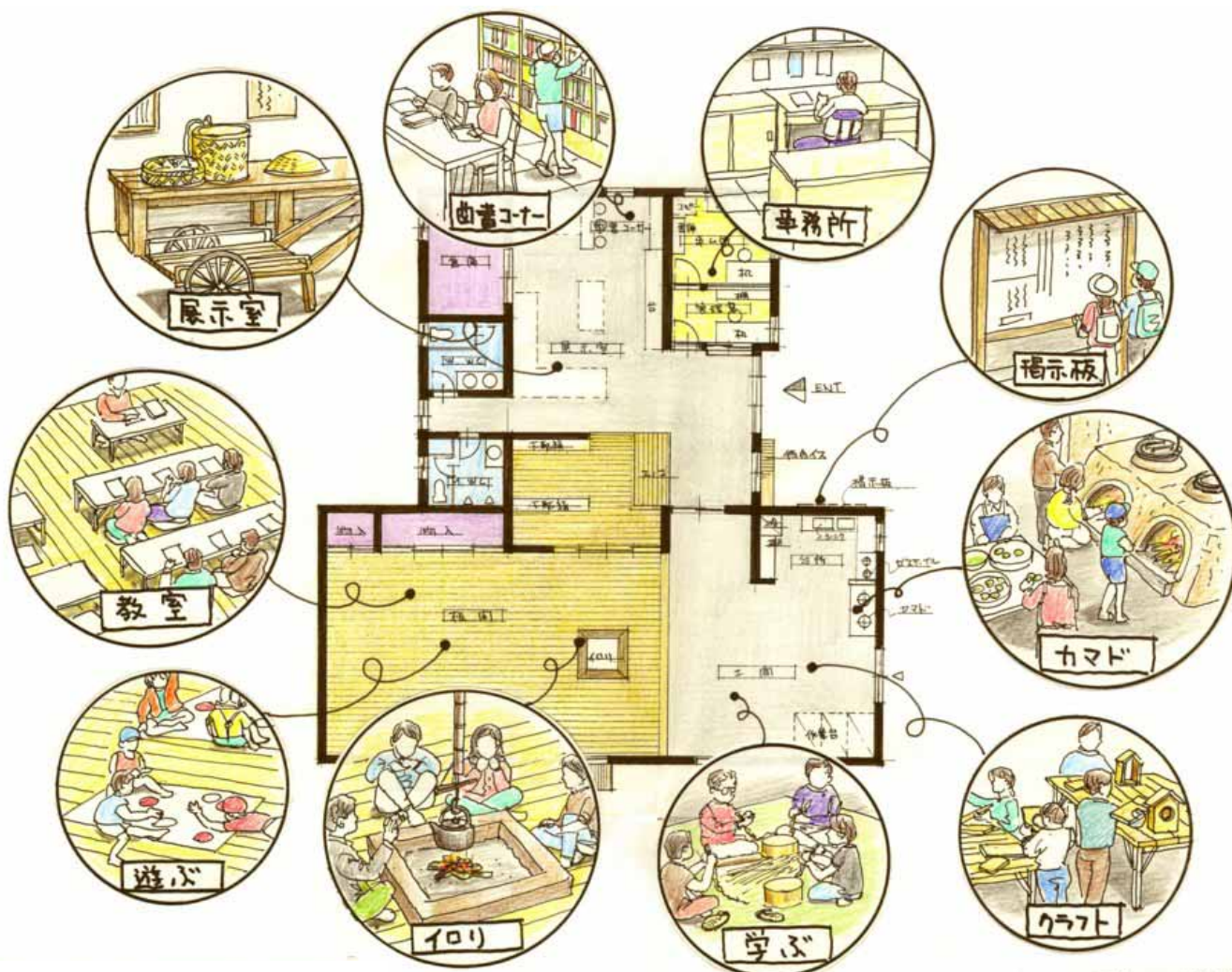
軒があり、下が「縁側」になっています。

⑧軒下では、秋の干し柿など、季節に応じて様々なものが干されています。

⑨縁側の外は低い生け垣に囲まれた、広い「庭」になっています。晴れているときには、庭でも様々な体験活動を行ないます。特に、体験活動に必要なものや収穫したものの乾燥にはなくてはなりません。

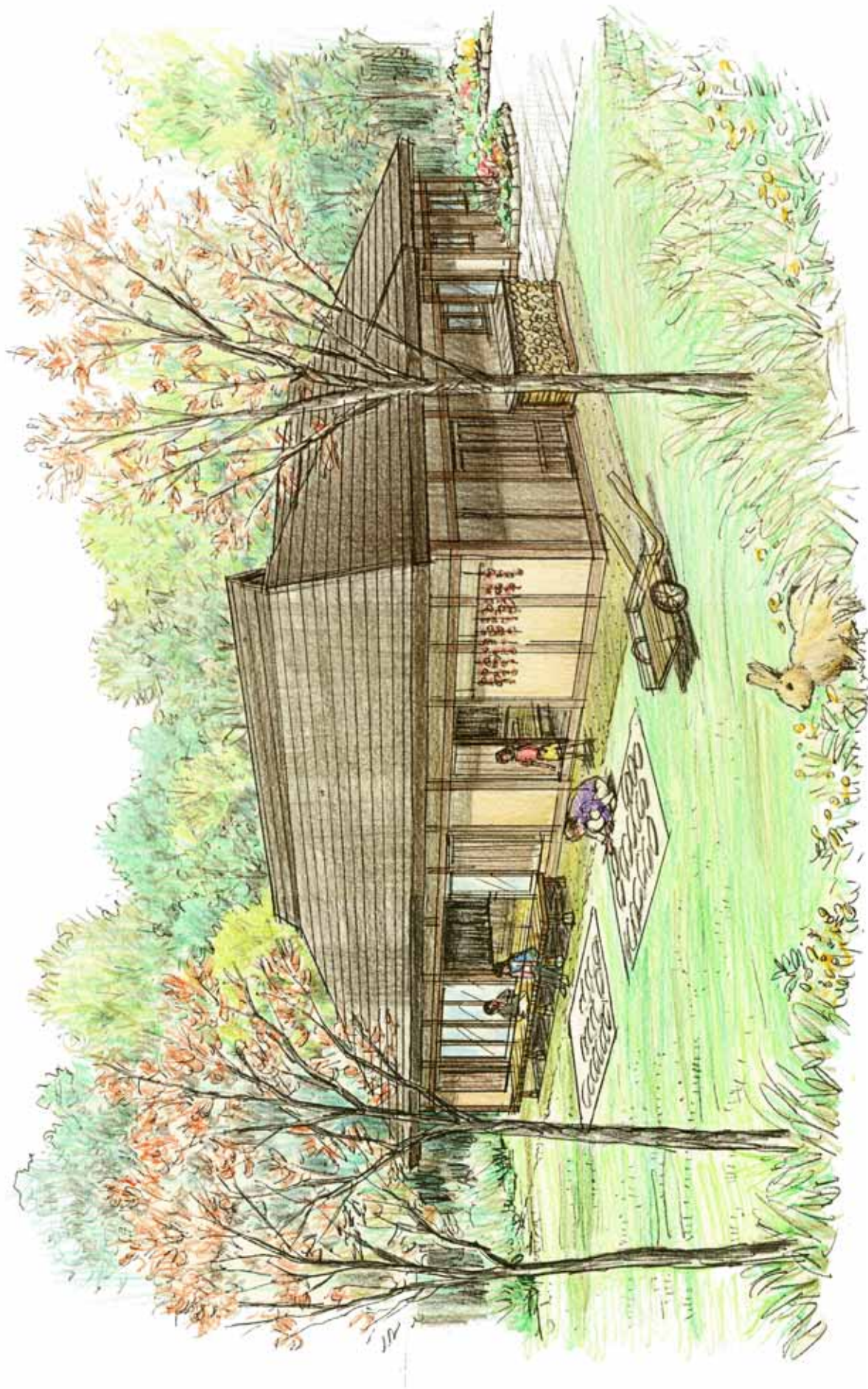
⑩トイレは、展示室の西にあります。直接外からも入れます。靴を履いたまま利用できるようになっていて、長靴などでも利用しやすい造りになっています。

⑪そのほか、展示室とつながり、また外からも直接入れる、倉庫があり、様々な活動に利用する、いろいろな道具の収納場所となっています。



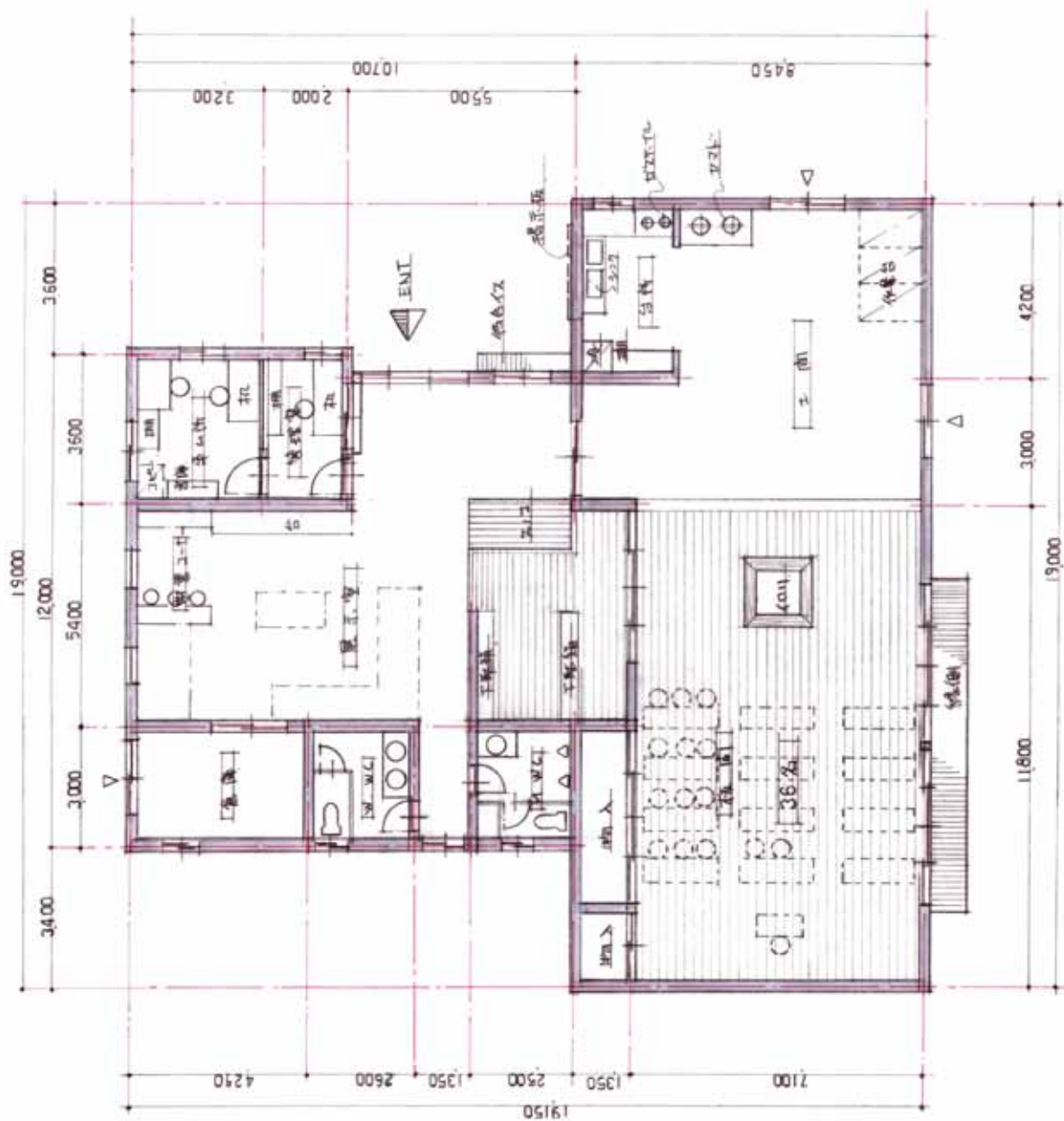
野津田 雑木林の会

図-2 《さとやまのいえ=DOMA HOUSE》空間利用図



図—3 《さとやまのいえ=DOMA HOUSE》鳥瞰図

野津田 雑木林の会



図一4 《さとやまのいえ=DOMA HOUSE》施設平面図

S = 1 : 100	H17.3.14	野津田・雑木林の会
	NOBUOKA	

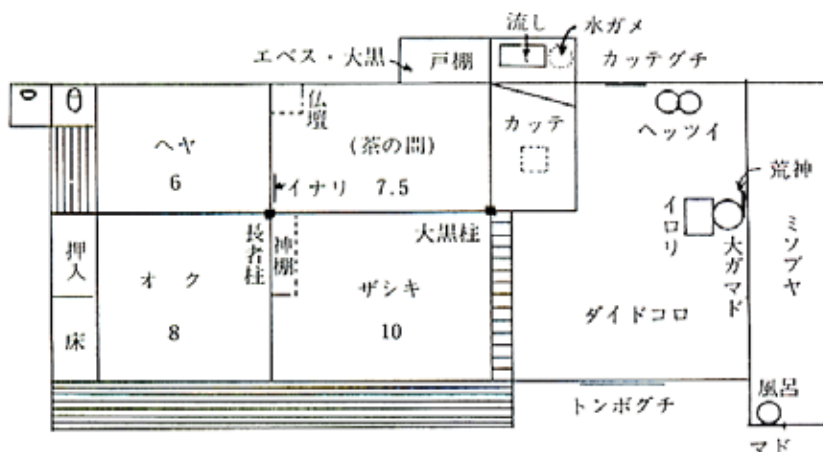
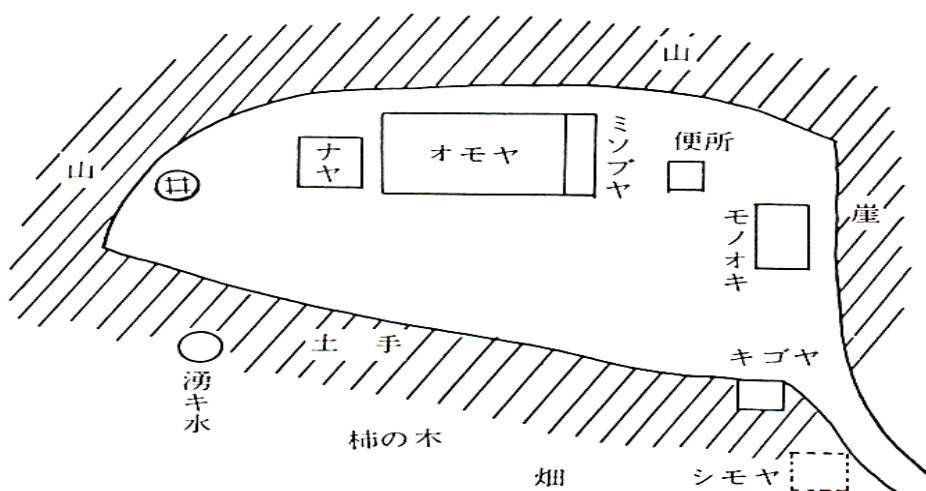
4.3 拠点施設づくりのヒント

●農家の屋敷取りと間取り

日本の昔の農家で印象的なのは、農作業の場であったニワ（前庭）が広いこと、そして、オモヤとは別棟に便所や納屋、物置などが機能的に配置されていることです。これは、ニワが大切な農作業の場であったことを意味しますが、現代の里山の保全活動を行なう上でも大切な視点です。里山の保全活動は必ずしもフィールドだけで行われるのではなく、道具の講習や工芸的な活動などでは、平らで一定面積があり、掃き清められたニワのような場所が不可欠です。拠点施設の整備にあたっては、雨をしのぐだけでなく、建物まわりにこうした広場的な要素を加えることを忘れてはならないと思います。

さらに、昔の農家の間取りを見てみると、土間が3割から4割程度の面積を占めているのにも驚かされます。ダイドコロという基本機能がありながら、天候が悪いときに屋内作業場に早変わりするというのが、この土間の、すばらしい多目的な役割です。

“家の中の外空間”＝土間は、人の交流機能を果たす場として、里山の拠点施設には是非取り入れたい空間です。



●イナリは内イナリで壁に祀っている

●見逃せない、「縁側」や「軒下」

土間を“家の中の外空間”と考えたとすれば、「縁側」「軒下」といった空間は“外と内の中間の場”とも呼んだら良いのでしょうか。靴をぬがずに雨をしのげるこうした空間は「干す」「休む」「集う」機能に優れ、現代の里山活動を行なう人、また来園者にも非常に魅力的な空間を生み出すに違いありません。



←2辺にわたってつけられている縁側
(国立市古民家)

長いひさしの納屋 (町田市) →



←萌芽更新などの里山作業に伴い、枝を分別保存するにつくられていたソダ小屋。こうした、軒のある小屋も現代の里山作業に活躍するはず

●水場と作業台

里山の拠点施設において、水場と作業台の仕様についてはこだわりたいものです。

水道設備は、どんな天候のときにも使えるよう、外部（または、内と外の中間的な場所）にありながら、雨がしのげる場所にあることが重要です。また、農機具や長靴などが洗いやすいように、高低差の異なる蛇口が多数あること、さらに、大きな桶やタイヤなどが置くために、流し台が広いことも大切です。

作業台は、木工作业その他、さまざまなクラフトを行なうには不可欠です。里山でのものづくり活動はアイデア次第で多様に展開できますが、素材は野山で調達するとしても、加工や組み立てはでこぼこした軟らかい土の上ではなかなかやりにくいものです。万力で素材をしっかり固定しなければやりにくい作業もあり、たくさんある必要はありませんが、できるだけ広く、どっしりとした作業台は是非とも必要です。



高さの異なる水道施設の例：

刃物の研ぎなどにも対応できるが、間口の広い流しもほしい



作業台の例：

土間の一角にこうした作業台が1つあれば、里山クラフト

で、いろいろなことが可能になる

4.4 造り方と運営

前項では、ひとまずいろいろな制約や条件を考えずに、私たちの理想の拠点施設としての「さとやまのいえ」の姿を示しました。

野津田公園において、こうした拠点施設の設置を具体的に実現するためには、経済的、空間的な条件などをはじめ、さまざまな制約が生じて、規模や仕様に変更が生じることがあるかもしれません。しかし、造る過程における次のコンセプトは、この施設のスピリットに関わることであり、大切にしていかなければならないと考えています。

●施設に、町田の伝統的な生活文化と新しい環境文化の両方を反映させる

昔の農家のスタイルには、農作業を機能的にこなす工夫がたくさんあり、土間や中庭など、家と野外の間のような場所が、現代におけるさまざまな自然体験の活動の空間としても、非常に高い利便性と機能性を持っていることは前項で示した通りです。しかし、昔の農家は照明不足や気密性の低さなどの問題があり、こうした弱点は、現代の技術で改善されなければなりません。

さらに、環境に配慮された施設の素材を選び、屋根緑化や太陽熱の利用などを上手に取り入れ、これからの環境文化を象徴したエコロジーハウスのような仕様で現代民家を創る考え方も大切です。“昔”だけにこだわるのではなく、新旧両方の文化、技術をうまく融合させた、“さとやまのいえ”ができないものでしょうか。



写真制から屋根緑化を見る。メンテナンスのために、ガラス板に屋根にすてられるようにしてある

長崎の草屋根の家：（村山建築設計事務所2002／事例に学ぶ屋上緑化・日経7-キ7外 2003）
人工土壌を使わずに、普通に手に入る資材を使って緑化屋根を試みた事例。改良アスファルト防水2層張りの上に透水マットを敷き、黒土とワラムシロを交互の3層重ねてつくられている。この家は個人宅だが、公園内の拠点施設にも使えそう。施工もボランティア実施が可能だという。

●地域の素材を利用する。

野津田公園では、炭焼き施設の釜をつくる素材として園内の土が使用されていました。「さとやまのいえ」でも、かまどに使用する土や土間のたたきに多摩丘陵産の土を使用するなど、伝統的に裏打ちされた文化を継承する意味から、大いに地域資源の活用をしていきたいものです。

山仕事の休憩小屋：（北山郁人氏）→
土と木材は地元、奥多摩町のものを使用。壁は稲わらのベースに土を塗り込んだもので、11回のワークショップに30人ほどが参加して完成。広さは15㎡と狭いにしても総建築費は20万円しかかかっていない。

（自給自足VOL.9 2005. 春号より）



●未完成部分を残し、住民参加で仕上げる

施設完成をすべて業者まかせにしないで、あえて未完成部分を残し、これに「さとやまのいえ」の利用者が関わって仕上げるというワークショップ手法が期待されます。土間のたたき、壁塗り、小屋づくり、植栽など、できることは多々あります。これは経費節減的な意味もありますが、施設の仕上げに多数の市民を参加させることにより、その後の多様な市民活動の交流が活発化する効果が大きいことは見逃せません。



2000年にメキシコで行われたストロー・ベイルハウス制作のワークショップ：

広さ28㎡ほどで総工費約500ドル。これは気候も風土も異なる国の事例ですが、考え方には学ぶべきものがあります。（草のちから藁の家 INAX出版 2000より）

●運営は委員会方式で

完成後の「さとやまのいえ」を上手に機能させ、活かすためには常駐スタッフが不可欠です。また、常駐スタッフをサポートするスタッフ組織も必要となります。

こうしたスタッフ体制の構築には、行政と市民の十分な検討が必要でしょう。

この場合、忘れてはならないのは、施設の設計段階において、市民から構成される運営委員会などの組織を設けることです。これによって、ソフト面で「さとやまのいえ」に要求される機能が、施設に備わっているかどうかを確認することができますし、場合によっては施設の仕様に変更や機能追加を行なうことも可能となるでしょう。何より、施設整備の初期段階からの住民参加の仕組みは、参加者の意識を高め、完成後の「さとやまのいえ」の市民交流機能にも大きく影響することとなります。

4.5 「さとやまのいえ」が生み出す活動の発展形

野津田公園に「さとやまのいえ」をつくることができれば、自然観察・動植物の保全・里山の手入れ・環境学習・冒険遊び場といった自然環境をベースとした市民活動は間違いなく活発化することでしょう。しかし、それは必ずしも私たちの会の活動だけに限ったものではありません。

すでに述べてきたように、拠点施設「さとやまのいえ」があることによって「雨天対応」「用具収納」「情報交流」といった、複数のメリットが生まれます。このことは結局、野津田公園の谷戸山としての魅力を高め、多くの市民を野津田公園に集め、交流を生むこととなります。こうした交流の活性化から、野津田公園の環境を機軸とした活動がさらに拡がりを見せ、多くの人に受け継がれていくと同時に、教育や福祉といった側面から野津田公園の雑木林や原っぱを活用する動向もこれまで以上に派生、多様に展開していくものと予想されます。

地理的にも、環境の規模や特性からも、北部多摩丘陵の入口と呼ぶに相応しい野津田公園における、このような人と里山の交流活動展開は、北部丘陵全体が抱える課題—農や自然、地域文化の保全といった視点からのまちづくりに、大きなきっかけを与え、また具体的なモデルにもなるのではないのでしょうか。

●秘密基地遊び



●即席の釜炒り茶実演



●セイタカアワダチソウのドームづくり



●草（カラムシ）で糸づくり



●セイタカアワダチソウの茎で「すだれ」づくり



●ナイトハイク



●縄文の焼き物をつくる



●ヨモギだんごづくり



●小枝と草のタペストリー



●原始機 (はた)



●昆虫観察会



●山しごと



●雑木林で音楽会



●チガヤの縄づくり



●落ち葉のかまくら



◆参考資料

- 『季刊 自休自足 春号 (NO. 9)』 株式会社第一プロGRESS 2005.
- 『草のちから薫の家』 INAX 出版 2000.
- 『国立市古民家』 パンフレット くになち郷土文化館 2003.
- 『子どものための公園づくりガイドライン』 国土交通省都市・地域整備局公園緑地課
(財)公園緑地管理財団 2001.
- 『自然ガイドむし』 文一総合出版 1989.
- 『実例に学ぶ屋上緑化』 日経アーキテクト 2003.
- 『青少年の育成を考える』 内閣府政策統括官(総合企画調整担当) ぎょうせい 2004.
- 『多摩民具事典』 (財)たましん地域文化財団 けやき出版 1997.
- 『民具と生活』 パンフレット 町田市立博物館 1991.
- 『四十二年間にわたる 正課「遊び」の時間の教育実験』 武田恭宗

◆資料 さとやまのいえ学習会

学習会報告「里山の家(仮称)を野津田公園に」

日時 2005年1月30日(日) 10時半～15時半 場所 野津田公園
講師 佐藤留美さん(NPO法人birth事務局長)

葉を落とした雑木林の無数の枝が、冬の空に繊細な線を描いている一月の終わり、「里山の家」を参加者と一緒に考えていくための学習会が開かれました。

幼いお子さんを抱いて現れた講師の佐藤留美さんと共に、建設希望地を歩いた後、「村野常右衛門」生家をお借りしての講演とワークショップを行いました。当日は、会のメンバーのほかに、多様な方々(町田環境管理組合理事長の田極公市さん、町田自然保護連合会代表の相本幸一さん、町田まちづくり市民会議・水と緑部会の岩上誠次さん、お年寄りのふれあいと悩み相談のネットワーク「サロン野津田友愛の窓」代表の新妻舞羽さん、乳幼児を持つお母さんたちの子育てサロン「町田たんぽぽ会」代表の宮下久美子さん、など)の参加を得て、活気のある論議が交わされました。



*講演「拠点づくりのポイントとは」

「里山の家」は、野津田公園における色々な活動の拠点と位置づけることができる。拠点を考えるためのポイントは、1.「目的」を明らかにする。2.「機能」を明らかにする。3. 機能を表現する「建築」を考える。行政に働きかけるときにもこの点を明確にする必要がある。そして大切なのは「人=コーディネーター」である。

形態としては、公設公営、公設民営、民設民営の三種類がある。たとえば、横浜市天王森公園の拠点は公的空間にあるが、市民が運営委員会を作って、運営している。八王子の長池ネイチャーセンターはNPOに運営委託されている。

(パワーポイントを用いた写真による事例紹介)

*ワークショップ「なぜ、野津田公園に拠点を作りたいのか」

参加者が、それぞれの思いをメモ書きにして発表し、模造紙に貼り出しました。たくさん出された意見を内容別に分けて整理するとー(次ページ)

- ① 里山の価値を表すシンボルとして
- ② この自然を残す大切さを伝える場として
- ③ 自然に関する情報、保全のための作業や行われている活動の情報を発信する場として
- ④ 人が自然と知り合うための入り口として
- ⑤ 自然と人の暮らし-衣食住遊-を結び、多様な体験の場として
- ⑥ 人と人との交流の場として
- ⑦ 雨風をしのぎ屋内作業をする場として
- ⑧ 活動の備品、道具や素材を収納する倉庫として

*まとめ「気づきからやる気、そして本気へ人を育てる基地として」

拠点の役割で重要なのは、「人を育てる基地」としての機能である。行動する人になる道筋は、無関心→関心(気づき)→理解(やる気)→行動(本気)→伝える、と進んで、自ら無関心な人々に働きかける人になっていく。「里山の家」に入った人が、出てきた時にはステップアップしていき、やがて、中で訪問者を迎えるようになる。

人を育てるためには、段階毎に、ソフト、ハード、人材が必要となる。第1段階の無関心層に「気づき」を促すには、<知る、感じる>ための機能、たとえば、展示、ちらし、イベント、ホームページなどがある。ソフトは情報発信機能、ハードは展示スペース、掲示板。受け付けは特に大切で、そこで笑顔の人が迎える。

第2段階の関心を持った人に対するキーワードは<出会う、学ぶ>。双方向の出会いの場が「やる気」を引き出す。ソフトとしては、カフェ形式のセミナーや団体間の交流会など。そのための地域の人や団体のデータベースづくり。ハードは、地元の土や木を使った部屋、エコハウス。重要なのは人(コーディネーター)で、地域の人間資源を引き出し、人と人を繋げ、出会った人たちが自分たちで活動を創っていく機会を提供する。

第3段階の「本気=行動」は<やってみる、伝える>。行動に踏み出した人の相談ののってアドバイスする機能が必要となる。企画づくりやアイデア出しなど。ハードとしては事務所。そこでは、情報収集とその編集表現、情報発信が行われる。



およそ2時間半にわたる学習会を通して、「里山の家」の意義と持つべき機能が整理され、提案書づくりへの画期的なステップとなったと思います。佐藤留美さん、そして参加された皆様、ありがとうございました！
(「里山の家プロジェクト」担当 吉崎洋子)

日本の伝統的な生活文化を再現してみる。同時にさまざまな分野の人が関わって新しい文化を育てる

雑木林や畑の作業の拠点となる建物。昔の建築のように土間やかまどがあって雨天時の活動を変える

野津田公園とその周辺の自然の豊かさを伝える。季節ごとの体験的・情報発信するビジュアルセンター機能を持つ

「里山の家(仮称)を野津田公園に！」

学習会<その2>

『市民による手作りの可能性』

主催：野津田・雑木林の会

日時： 2005年9月10日(土) 13時30分～17時
会場： 民族文化映像研究所内
(裏面の地図を参照)
内容： 16ミリ映画「旧岩澤家住宅の復原」(30分)上映
所長・姫田忠義氏も交えての座談会
参加費： 無料

上映作品には、壁を塗り、土間をうち、かまどを築く様子もおさめられています。

野津田公園は、縄文土器が出土した場所。だからこそ、土地の土を使った作業を自分たちでやってみたいという声もあります。

今回は、手作りの経験豊富な土地の農家の方や、古い民家を修復し喫茶店を手作りされた公園プランナーのプロの方も、ゲストにお招きしました。

<やってみたいこと>の可能性を、あらゆる角度から話し合ってみたいと思います。

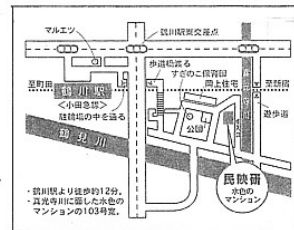
どうぞ、皆さん、ふるってご参加ください。

問い合わせ先：野津田・雑木林の会事務局
045-961-5045 (久保)

●上映作品

川崎市立日本民家園映像記録事業
「旧岩澤家住宅の復原」 1990年度作品

日本には、日本独特の民家の作り方がある。岩澤家は、神奈川県愛甲郡清川村にあった江戸時代初期の民家である。それが、昔ながらの工法で復元される。家を建てるには、種々の行程があり、それに伴った職人たちがいる。種々の職人の作業工程を追い、日本人が暮らしてきたたずまいがどのようにして作られていくかを探る。——「制作意図」より抜粋



会場： 問い合わせ 044-986-6461(民族映像研事務局)

◆資料 新聞記事

地域ニュース

町田の野津田公園 東側地区整備

自然利用の活用10案

市民団体が市側「参考」にしたい

町田市は、総合公園「野津田公園」(総面積約四十万、同市野津田)のうち、未整備の東側地区(千四百坪)で整備計画の進展を進めているが、多摩丘陵の自然を継ぎ市民団体が「雑木林を守る会」(内野津田)は、市民が自然を共有できる公園作りをアイディアを東側地区の「活用提案書」として、寺田和雄市長に提出した。

野津田公園は、昭和五十一年に建設したが、総合体育館五基に都市計画決定、同六一年用地買収が難航し、同市十二年、蹴球球場を完成、別荘地開発、東側の運動施設主体のスポーツ公園構想が打ち出された。地元の自然愛好者がこれに伴い、建設を予定していた「野津田公園を守る会」を結成し、建設反対運動を繰り広げてきた。

このうち、西側の工事で、陸上競技場を予定していたが、陸上競技場を強引した。

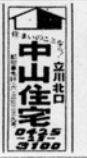
野津田公園は、昭和五十一年に建設したが、総合体育館五基に都市計画決定、同六一年用地買収が難航し、同市十二年、蹴球球場を完成、別荘地開発、東側の運動施設主体のスポーツ公園構想が打ち出された。地元の自然愛好者がこれに伴い、建設を予定していた「野津田公園を守る会」を結成し、建設反対運動を繰り広げてきた。

市側は、今年度内に竣工の見込みだが、「市民」の内部組織「野津田」は、「その前に提案書を提出し、市民の意見を反映させよう」と、十か月がかりで活用提案書を作った。

提案では、高等植物の注目種と雑草古澤、農地など、公園に保つる自然や歴史資源を挙げ、市民農園や環境教育、炭焼き、草木染の施設、里山文化伝承館、実験場を具体的な活用案十項目を助記。昔ながらの山仕事も参考し、市民が自然を借りながら育ていける方を示した。

野津田として、市公園緑地課は「参考になる要素が多い。蹴球球場の再検討が必要となつてい

は計画通り建設するが、蹴球球場の建設については市民団体の意見も、ほかに地については、提案も参考にならないなら、また別の方法を検討と理解を示しており、双方の譲歩が期待できると述べている。



1997年(平成9年)8月17日 日曜日

「自然残して」と舗装は最小限に

「市民の声」で公園が変わる

町田・野津田公園 整備計画を変更

モニュメントやめ、草地・雑木林保存

町田市の総合公園「野津田公園」(総面積約四十万坪)のうち、未整備の東側地区(千四百坪)で整備計画の進展を進めているが、多摩丘陵の自然を継ぎ市民団体が「雑木林を守る会」(内野津田)は、市民が自然を共有できる公園作りをアイディアを東側地区の「活用提案書」として、寺田和雄市長に提出した。

野津田公園は、昭和五十一年に建設したが、総合体育館五基に都市計画決定、同六一年用地買収が難航し、同市十二年、蹴球球場を完成、別荘地開発、東側の運動施設主体のスポーツ公園構想が打ち出された。地元の自然愛好者がこれに伴い、建設を予定していた「野津田公園を守る会」を結成し、建設反対運動を繰り広げてきた。

このうち、西側の工事で、陸上競技場を予定していたが、陸上競技場を強引した。

野津田公園は、昭和五十一年に建設したが、総合体育館五基に都市計画決定、同六一年用地買収が難航し、同市十二年、蹴球球場を完成、別荘地開発、東側の運動施設主体のスポーツ公園構想が打ち出された。地元の自然愛好者がこれに伴い、建設を予定していた「野津田公園を守る会」を結成し、建設反対運動を繰り広げてきた。

市側は、今年度内に竣工の見込みだが、「市民」の内部組織「野津田」は、「その前に提案書を提出し、市民の意見を反映させよう」と、十か月がかりで活用提案書を作った。

提案では、高等植物の注目種と雑草古澤、農地など、公園に保つる自然や歴史資源を挙げ、市民農園や環境教育、炭焼き、草木染の施設、里山文化伝承館、実験場を具体的な活用案十項目を助記。昔ながらの山仕事も参考し、市民が自然を借りながら育ていける方を示した。

野津田として、市公園緑地課は「参考になる要素が多い。蹴球球場の再検討が必要となつてい

は計画通り建設するが、蹴球球場の建設については市民団体の意見も、ほかに地については、提案も参考にならないなら、また別の方法を検討と理解を示しており、双方の譲歩が期待できると述べている。

あとがき

昨年4月に「里山の家プロジェクト」が発足し、1年にわたって議論や学習会を重ねた結果、この提案書は完成いたしました。

13回にのぼるプロジェクト会議の前半はコンセプトワークに費やされ、プロジェクトメンバーによる情報収集のほか、市の担当者や専門家の方々からのアドバイスもいただきました。

この《さとやまのいえ=DOMA HOUSE 構想》提案書は、素案というべきものです。自然界のさまざまないのちと人間が共に生きてきた里山は、人間のいとなみを多面的に含んだ暮らしの場です。野津田公園の自然を愛する方々はもとより、今まで野津田公園に足を運んだことのない方々からもご意見を出していただき、今の時代に求められている形に練り上げていくこと、そして『さとやまのいえ』実現に向けて、町田市として具体的な検討に入っていただくことを心から願っております。

里山の家プロジェクトメンバー：

青沼義信・内野秀重・岩田伸子・大塚康司・鎌上茂樹・鎌上美智子・久保礼子・菅原隆・高井敬子・鶴岡秀樹・延岡道夫・堀江久子・吉崎洋子

参加、協力いただいた方々：

NPObirth：佐藤留美 原始技術史研究家：関根秀樹 民族文化映像研究所・所長：姫田忠義

発行：野津田・雑木林の会 2005年9月

図版・イラスト：延岡道夫・鎌上美智子

写真提供：内野秀重・菅原隆・久保礼子・鎌上茂樹・鎌上美智子

編集：内野秀重・菅原隆

野津田・雑木林の会ホームページ：<http://www.nozuta.net/>

本提案書は「財団法人 日野自動車グリーンファンド」の助成により製作しました。



発行： 野津田・雑木林の会 2005年9月